

天理市埋蔵文化財調査概報

(平成7年度・国庫補助事業)

柳本遺跡群道浦地点

柳本遺跡群竹ノ尻地点 (第3次)

和爾・森本遺跡近接地

1996

天理市教育委員会

例 言

1. 本書は、天理市教育委員会が平成7年度国庫補助事業として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。本概報には、柳本遺跡群道浦地点、柳本遺跡群竹ノ尻地点（第3次）および和爾・森本遺跡近接地の調査概要を収録している。
2. 調査は、天理市教育委員会社会教育課が実施し、技術吏員青木勤時が現地調査を担当した。
3. 本書収録の調査地および調査期間は次のとおりである。

柳本遺跡群道浦地点	天理市岸田町197番地	平成7年6月22日～8月4日
柳本遺跡群竹ノ尻地点（第3次）	天理市柳本町740-1番地	平成7年8月22日～8月31日
和爾・森本遺跡近接地	天理市檜町535-3番地	平成7年9月26日～10月27日
4. 現地調査から遺物整理作業および本書作成に至るまで下記の方々の御助力を得た。記して謝意を表する（敬称略・順不同）。

西山陽子（堺女子短期大学卒業生）、市村慎太郎（奈良大学学生）、田坂佳子・田中涼子・清岡廣子・松井直樹・矢持久民枝・八重樫由美子（天理大学学生）、中山玉生（京都橋女子大学学生）
5. 現地調査および出土遺物について、下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である（敬称略・順不同）。

近江昌司（天理大学）・岡崎晋明（龍谷大学）・寺沢薫（勸シルクロード学術センター）
・土橋理子・小池香津江（奈良県立橿原考古学研究所）・前澤部浩（大和高田市教育委員会）
・大川寿一（花園大学学生）
6. 本概報の執筆および編集は青木勤時がおこない、遺物説明の一部に中山玉生の助力を得た。

目 次

柳本遺跡群道浦地点の調査

I はじめに	2
II 調査の概要	2
(1)層序	2
(2)検出遺構	4
(3)出土遺物	9
III まとめ	16

柳本遺跡群竹ノ尻地点の調査

I はじめに	17
II 調査の結果	17

和爾・森本遺跡近接地の調査

I はじめに	19
II 調査の概要	20
(1)層序	20
(2)検出遺構	21
(3)出土遺物	23
III まとめ	28



図1 平成7年度国庫補助事業調査地点 (S=1/50000)

柳本遺跡群道浦地点の調査

I はじめに

天理市南部の東山麓沿いには多数の前期古墳を主体とする大和・柳本の古墳群が展開する。これら古墳群の周辺地域では、その造営基盤を形成していた集落群の存在が考えられるところであるが、現状では成願寺遺跡、柳本遺跡等が周知の遺跡として認識されているに過ぎない。しかしながら、実際には先述の両古墳群周辺には広範囲にわたる遺物散布が認められ今後の調査の進展により実像が明らかになるものと期待される地域である。

天理市教育委員会では、これらの地域においてこれまでの小規模な調査の積み重ねにより遺跡散布の同時期性あるいは土器様相の共通性から古墳出現前後期の遺跡群として仮に「柳本遺跡群」として認識し、開発行為にともなう確認調査を随時すすめている。

今回の調査は、天理市岸田町字道浦における宅地造成に伴って実施したものであり、調査地の北方に前期古墳と考えられる矢矧塚古墳が近在するため、この前後期の集落の存在確認を目的とした。結果的には弥生時代後期末～古墳時代後期の遺構を主体として確認している。また、この地域で初の発掘調査であったため



図2 調査地位位置図 (S=1/5000)

多くの新知見を得ることができた。現地における調査は平成7年6月26日より開始し、同年8月4日にすべての調査に係る作業を終了した。総調査面積は約230㎡であった。

II 調査の概要

(1) 層序

当調査地における土層堆積状況は以下に記す通りであるが、調査区の東西に自然河道があり、その影響により層序に乱れが認められるため必ずしも良好な基本層序を抽出するこ

とはできなかった。そのため、ここでは比較的層序の区分が容易であった南壁の堆積状況から記述しておきたい。

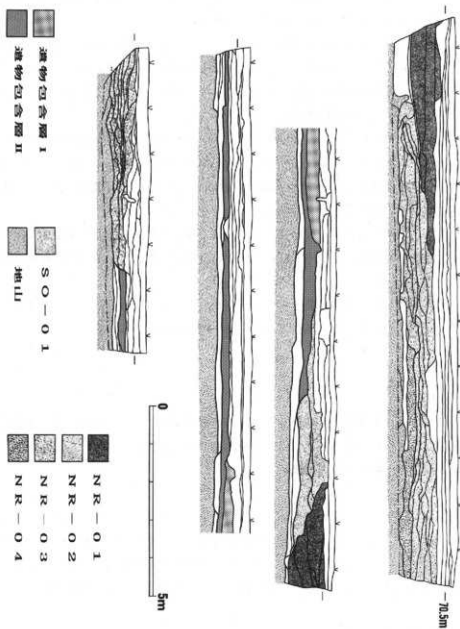


図3 調査区西壁・南壁および東壁土層図 (S=1/100)

第Ⅰ層：暗灰黄～暗褐色砂質土 層厚15～20cmで調査区全面に広がる。表土層および耕作土である。

第Ⅱ層：暗灰黄色砂混じり粘質土 層厚25～30cm。上面より素掘り溝、小穴等の近世・近代頃の掘り込みが見られ南壁西端では自然河道群の上部堆積層を切り込んで東側に傾斜しながら堆積する。床土相当の堆積層である。

第Ⅲ層：黒褐色砂混じり粘質土（遺物包含層Ⅰ） 層厚40cm前後。調査区中央の微高地上にのみ遺存する。粗砂が混じり、多量の弥生後期末～古墳前期初頭土器片を含む。包含される遺物の時期が下位の第Ⅳ層のものより若干新しく、皿状を呈して部分的にのみ堆積するため遺構であることも考えられる。

第Ⅳ層：暗黄褐～黒褐色砂質土（遺物包含層Ⅱ） 層厚20～35cm。調査区中央に遺存し、ほぼ水平に堆積する。弥生後期後半～末を主体とする土器片を多量に含み、上面において古墳後期末以降の自然河道群を検出している。また、調査区東半では東西方向に延びる中世の素掘り小溝群が同一面で認められた。

第Ⅴ層：黄灰～暗褐色砂質土 層厚15～20cm。若干量の弥生後期以前の土器片を含むが、上位の遺物包含層に比べると極めて少ない遺物量である。上面は弥生後期の遺構検出面となる。

第Ⅵ層：褐灰～オリーブ褐色砂質土・シルト（地山） 砂質土およびシルトを基調とするが、調査区の西から西北部分では砂礫の堆積が認められる。

(2)検出遺構

今回の調査では、第Ⅳ層および第Ⅴ層の上面で自然河道、小穴、土坑、溝、不整形な落ち込み等の遺構の検出が見られた。以下、検出遺構面毎の概要を記述しておく。

第Ⅳ層上面検出遺構（上層遺構面）

自然河道 NR-01

調査区西側に位置し、北東から南西に向かって流れる河道である。上面幅2～4mを測り、深さは0.4～0.6mと浅い。河道の底面には急激な水流による小溝状の凹凸が著しく認められる。埋土は、上部が親指大～拳大の礫を多量に含む淡黄褐色砂礫土を基調とし須恵器、土師器等の破片を多く含む。下部は灰オリーブ色粗砂が堆積し遺物の出土は極めて少ない。

自然河道 NR-02

調査区西側に位置する。自然河道 NR-01 に切り込まれるかたちで東西に広がる砂礫の溜りである。底面には凹凸が見られ NR-01 と同様な方向で流れていたものと考えら

れる。上面幅約7m、深さは平均して0.2~0.3mと浅いが最深部では0.6mを測り、北端と南端では0.3mの比高差が認められる。埋土は、細かい砂礫を含む褐色~暗灰黄色シルト質土を基調とし部分的に細砂のブロックが介在する。埋土中より須恵器、土師器等の小片がわずかに出土している。

自然河道 NR-03

調査区の東北端に位置し、不整形な平面形状で検出している。東西8m、南北6mの規模で、南西方向側の肩部のみを確認している。また、南西の突出する部分の法面では崖状を成すオーバーハングが見られ、ここでも急激な水流による痕跡が認められた。底面には段差や凹凸が見られ、西側が0.8mと最も深い。埋土は上部が大小の礫を含む灰黄褐色砂礫土、以下は黄褐~灰黄色粗砂・細砂、黒褐色砂混じり粘質土の互層である。遺物は埋土のいずれからも出土しており、須恵器、土師器等の小片が主体である。

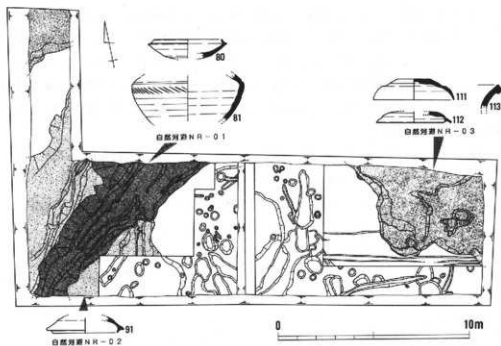


図4 第IV層上面検出遺構平面図 (S=1/200)

自然河道 NR-04

調査区西北端で検出した。NR-04 よりも下位に堆積が見られ、その他の自然河道よりも時期的に遡るものと考えられる河道である。検出面からの残りは浅く、深さは0.3~0.4mほどである。埋土は、黄褐~褐色粗砂・砂混じり粘質土と同色のシルトを基調に拳大の礫が疎らに混じる。遺物は極めて少なく、わずかに弥生後期の土器片が出土しているのみである。他の3条の河道よりも古い段階での流れ込みであったと考えられ、後述の下層遺構面に伴う自然河道と思われる。

第V層上面検出遺構(下層遺構面)

第V層の上面では小穴、土坑、溝や不整形な落ち込み等の遺構を多く確認している。いずれも残りが浅く、遺物の出土量も少ないため詳細な時期の特定できるものは少ない。ここでは帰属時期の特定可能な主要遺構についてのみ記しておく。なお、下層遺構面の調査は調査期間、経費等の諸々の事情により調査区の全域ではなく範囲を限定して実施した。

落ち込み SO-01

下層調査区の西端に位置する。検出長東西4.6m、深さ0.15mの浅い落ち込みである。埋土上面および底面においても重複した遺構が見られる。底面は西へ傾斜しており、掘り込みというよりも傾斜面上の堆積層の様相を呈する。埋土は、粘性の強い黒褐色砂混じり粘質土で上部の一端は自然河道 NR-01 および NR-02 に切り込まれる。第IV層の上位に堆積し、下層遺構面で層位的に最も新しいことがわかる。遺物は古墳中期末~後期初頭の土器がわずかに出土しており、須恵器坏身片(図9-120)や土師器小片等がある。

落ち込み SO-02

下層調査区の中央部で検出した不整形な落ち込みである。検出長は東西1.4m、南北5mで、西半は検出面の誤認のため欠いてしまったが西方へ浅く広がっていたものと思われる。深さは最深部で0.3mを測る。また、この最深部は落ち込み底面に溝状にあり、中央アゼを挟んで北西にL字状に延びる。このため上部の落ち込みとは別個の遺構であったかもしれない。埋土は炭や焼土を含む黒褐~暗褐色砂混じり粘質土で、上部の皿状の落ち込み部分と下部の溝状部分でも大きな違いは認められなかった。遺物にも大きな時期差は無く同時期に埋没したものと考えられる。弥生後期後半頃の土器片が多く出土している。

土坑 SK-01

調査区中央西寄りに位置する長径1m、短径0.6m、深さ0.3mの土坑である。埋土は黒褐色粘質土で上部はやや砂質である。遺物は埋土の下部から少量ながら出土している。

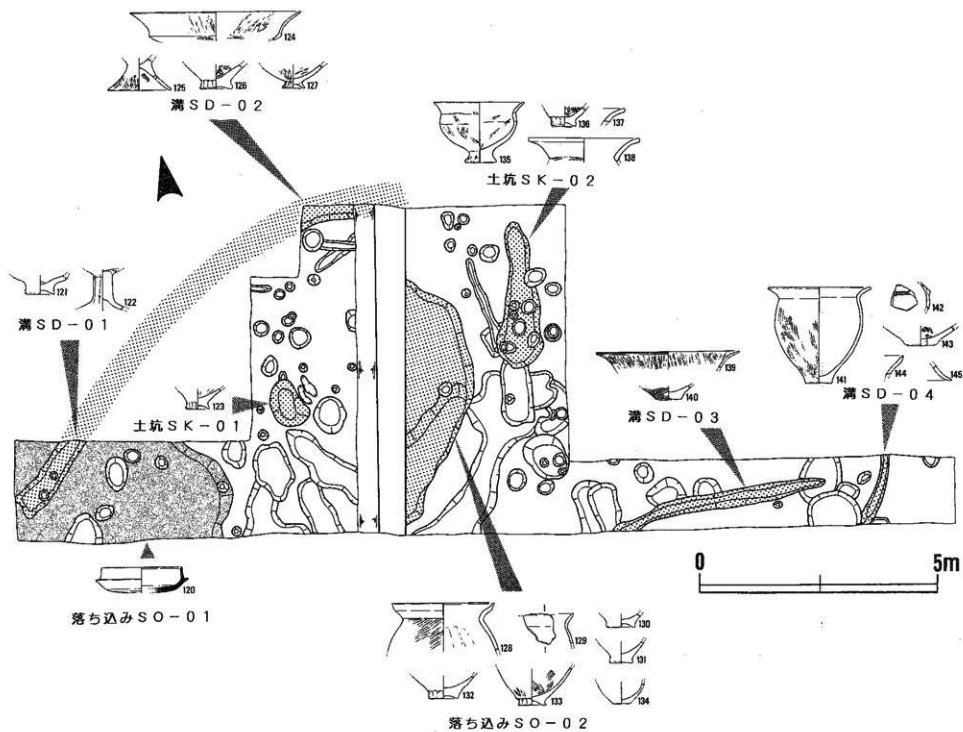


图5 第V層上面検出遺構平面図 (S=1/80・土器図1/6)

土坑 SK-02

調査区中央東寄りで検出した南北に長い土坑である。南北長3m、東西の幅0.6mを測り、深さは0.15mである。埋土は黒褐色で粘性が弱く炭を多く含む粘質土である。出土遺物には弥生後期の土器片が多く、完形の脚付き鉢(図9-135)が1点出土している。

溝 SD-01

調査区の南辺西寄りに位置する北東から南西に延びる溝である。上面を落ち込みSO-01に切られているため残りは浅く0.15m程である。南端は削平によりそれ以上の延長は確認できなかったが現存長1.8m程が残り、幅は0.5mである。埋土は、黒褐色砂混じり粘質土で、少量の弥生後期の土器片が出土している。

溝 SD-02

下層調査区中央の北端で南肩のみ検出した溝である。東から南西の方向へ湾曲する平面形態からおそらく先述の溝SD-01に連続するものと思われる。東西の検出長1.6m、幅は北壁の土層観察から0.7m程度と考えられる。深さは0.4mを測り、埋土は上部が黒色粘質土、下部が黒褐色砂混じり粘質土で弥生後期土器片を多く含む。

溝 SD-03

下層調査区東の南辺で検出した東西に延び、西端が南へ屈曲する溝である。検出長は5mで幅0.3~0.5mを測る。埋土は黒色砂質土で遺物の出土量は少なく弥生後期土器の小片が数点出土したのみである。

溝 SD-04

調査区の東端に位置し、やや弧状に延びる平面形態の溝である。検出長1.5m、深さは0.3mで北端に向かって浅くなる。埋土は黒褐色粘質土で北端に完形の甕(図9-141)を含む弥生後期土器の集積が見られた。

(3)出土遺物

包含層出土土器(図6-1~31・図7-32~79)

1~5は、第Ⅱ層床土相当層の出土土器である。1は信楽焼の破片を転用したメンコ状の玩具である。2は信楽焼摺鉢、3・4は土師器小皿、5は土釜である。いずれも中世後期から近世にかけての帰属時期でとらえられる。

6~31は、第Ⅱ層および第Ⅲ層より出土した土器である。第Ⅲ層は調査区中央部分にのみ遺存する遺物包含層であり、図示したもの他に須恵器小片や布留甕小片の出土が見られた。6~11は壺である。6は二重口縁壺の小片で、外面には竹管文が見られる。8~11の広口壺には大小の各種類があり、9の受け口状口縁の壺が特徴的である。12の甕は口縁

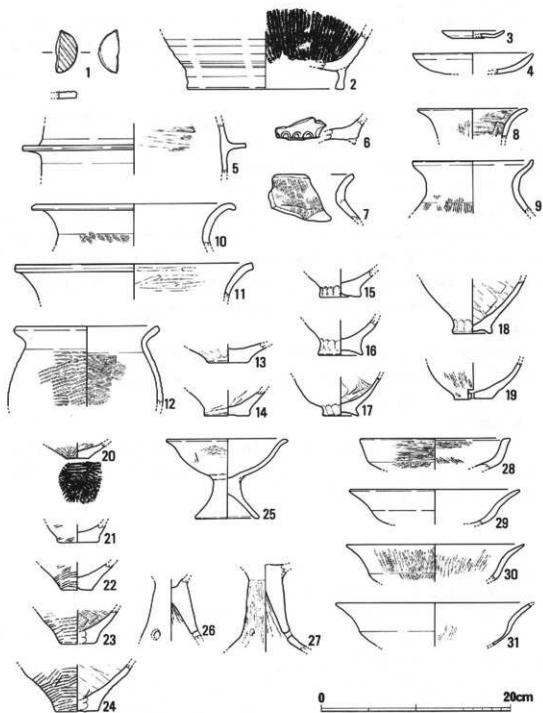


图6 包含層出土土器实测图1 (S=1/4)

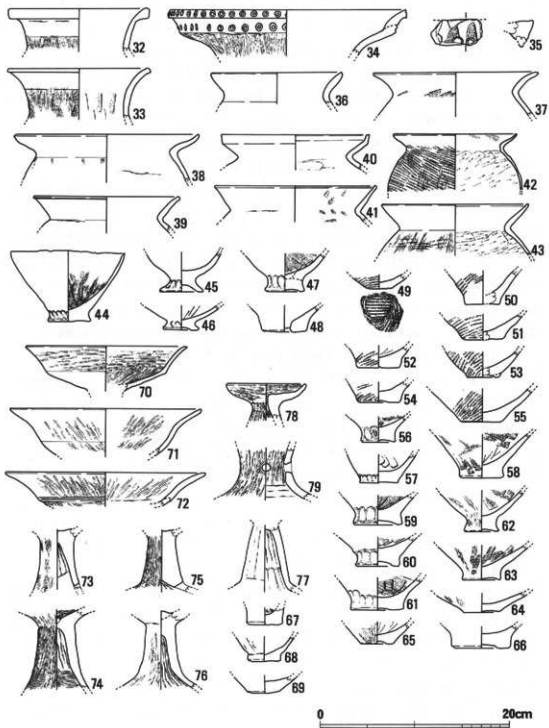


图7 包含层出土土器实测图2 (S=1/4)

部がやや肥厚し端部に面をもつ厚手の叩き甕である。13・14は外面の調整より壺の底部と
思われる。15-18は底部付近の指頭圧痕が明瞭な鉢である。19の有孔鉢はやや丸みを帯び
た体部に小さな円孔が穿たれている。20-24は叩き甕の底部である。20の底部片にのみ底
面にタタキの押圧痕が見られる。25-31は高環である。25は端部を外方に短く突出させ
た碗型の高環で、小さな円錐状の脚部が付く。形態的に見て弥生以降の帰属時期が考えら
れる。26・27の脚柱部は、どちらも3方向に円孔が残る。環部では、28が短く直立気味
にのびる古い様相の口縁形態をもつものに対し、29-31は弥生後期に通有な外反口縁をもつ。
これらの高環はいずれも内外面にミガキ調整が施されている。

32-79は、第IV層の出土土器である。32-35は壺である。32・33は広口壺、34は口縁部
外面に竹管文が巡る二重口縁壺である。35の口縁端部片には波状文、竹管文による装飾が
施されている。36-43は甕の口縁部から肩部が残る破片である。弥生後期的な外反口縁の
甕のみでなく、40の受け口状口縁や41-43のような直線的な口縁のものがある。42は典型
的な庄内大和型甕で、胎土にわずかに角閃石を含み淡褐色の色調を呈する。43はタテハケ
基調の布留傾向を示す庄内甕である。外面をタタキのちタテハケで消し、内面を削る。
44-48は鉢である。底部周辺および脚台部分に明瞭な指頭圧痕、内面にハケメ調整で仕上
げられる。48は有孔鉢である。49-55は甕の底部である。大半のものに底部輪台技法が認
められる。49の底部片には前述の20と同様に底面にタタキを残す。56-69は大小各形態の
壺の底部である。70-76は高環で、環部はいずれも外反口縁をもち、丁寧な作りである。
71は他に比べやや深めの環部で稜は鈍く、口縁部もやや長い。73・75は3方向に円孔を残
し、75のみ脚柱部が中実である。78は中空の小型器台で、内外面に密なミガキが施され、
精良な胎土で作られている。79は器台の柱状部である。4方向に円孔が残り、内外面とも
にミガキが施される。

上層遺構面自然河道出土土器 (図8-80-119)

80-90はNR-01出土土器である。80・81は須恵器である。80の坏身は小型で立ち上
がり短く、底部付近の回転削りも浅く粗雑な作りのものである。81の体部片は台付長頸
壺のものでやや肩部が張り外面には櫛歯列点文が巡る。82-90はいずれも弥生後期の土器
である。82の装飾のある壺にのみ外来影響がうかがえるが、他は在地産であろう。

91-110はNR-02出土土器である。91の須恵器坏蓋は天井部よりも突出した短いかえ
り部をもつ。92-110は弥生後期後半~末のもので、甕では外反口縁やタタキ調整のもの
が大半であるが、96のように外面をハケやナデで調整するものもみられる。

111-117はNR-03出土土器である。111・112は須恵器坏蓋である。111はやや

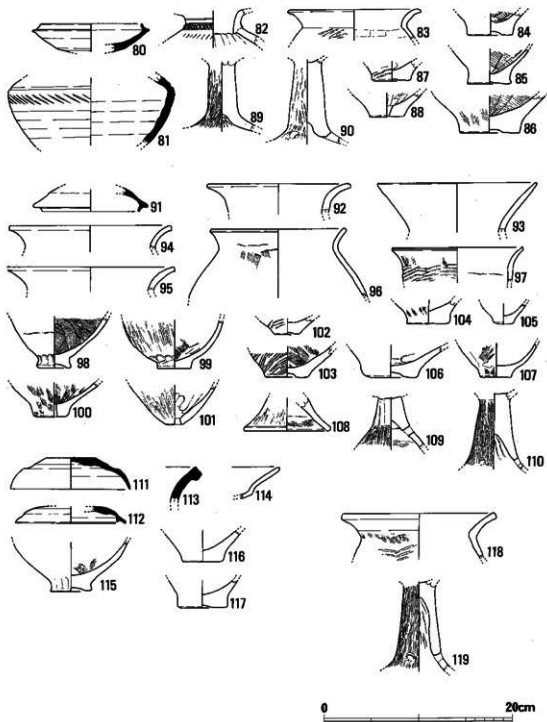


图8 上层遺構面檢出遺構出土土器実測図 (S=1/4)

口径の大きなもので天井部外面はヘラ切り未調整なままである。112は器高が低く、内面には小さく短いかえり部をもつ。どちらも粗雑なつくりである。113は須恵器広口壺の口縁部の小片である。他に弥生後期の土器では高環部部の小片114や壺底部片116・117がある。

118・119はNR-04出土土器である。ここでは弥生土器片のみ出土している。118の叩き甕は端部に面をもち、やや厚めの外反口縁をもつ。頸部付近にタテハケが残り外面をタタキ調整する。119は高環の脚柱部である。外面に細かいタテヘラミガキを施し、内面にはシボリ痕を残す。また、円孔が3方向に穿たれている。

下層遺構面主要遺構出土土器（図9-120～145）

120は落ち込みSO-01出土土器である。高く直立気味に延びて端部に段をもつたちあがり部が特徴的な須恵器坏身である。

121～122は溝SD-01出土土器である。121は突出したくぼみ底を呈した壺底部である。122は外面に靱圧痕が残る中実の高環脚柱部である。外面はタテヘラナデで調整される。

123は土坑SK-01出土の弥生後期土器片である。形態から鉢の底部と思われるもので外面に弱い指頭圧痕、内面に板ナデ原体の圧痕が残る。

124～127は溝SD-02出土土器である。124は高環の坏部である。器壁の薄い外反口縁の破片で内外面ともにタテ方向のミガキを施している。125は大型鉢の脚台部と考えられるものであり、外面にタテ方向のミガキ、内面にナナメハケで調整され3方向に小さな円孔を残す。126・127はいずれも鉢の底部と思われる。

128～134は落ち込みSO-02出土土器である。128は口縁部の上端に平坦な面をもつ受口状口縁の甕である。外面にタタキ、内面にナナメ指頭ナデを残す。129の甕片は内外面ともにナデ仕上げである。130～134は壺あるいは鉢の底部である。

135～138は土坑SK-02出土土器である。135は完形の小型台付鉢である。椀型外反口縁の鉢部に中実平底の脚台が付くもので、内外面にハケ調整が施されている。136は壺の底部片で突出した窪み底を呈する。137は口縁部の小片である。138は甕の口縁部であり、端部に面をもちやや厚手である。

139・140は溝SD-03出土土器である。139は高環口縁部の小片で、器壁は薄く内外面に密なミガキが施されている。140は叩き甕の底部である。

141～145はSD-03出土土器である。141は完形の小型甕である。口径の広い外反口縁をもち、外面はタテハケで仕上げられており内面はナデ調整を施す。142は手焙り型土器の体部から覆い部分にかけての小破片である。外面には刻み目突帯を付す。143は壺底部

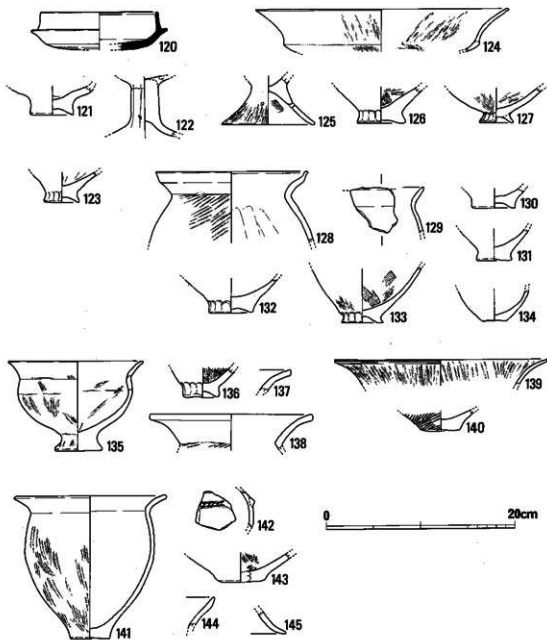


図9 下層遺構面検出遺構出土土器実測図 (S=1/4)

で 144 は甕の口縁、145 は高環の脚裾部と思われる。

(4)小結

ここでは層序および遺構と出土遺物の関係についてまとめておく。

第Ⅲ・Ⅳ層(遺物包含層)をベースとした上層遺構面では、NR-01～04の4条の自然河道を検出している。調査区西壁の観察から層位的に見てNR-04のみが時期的に先行して存在し、下層遺構面に伴うことが判るが、その他の自然河道はいずれも上層遺構面に伴うものであるのは間違いない。NR-01～03についてはそれぞれの出土遺物から埋没時期を推定できるが、多少の重複関係が見られるものの概ね古墳後期後半～末(6世紀末～7世紀前半)であることが考えられよう。また、この時期幅の中で各自然河道が徐々に埋没したと思われる。また、底面の形状の共通性から一時期の強い流れ込みにより形成された河道群であることが推測される。

第Ⅴ層上面の下層遺構面からは大小の遺構が多く検出されている。出土土器の大半が後期後半～末の時期幅にあり、概ね弥生後期段階の集落の一角を占めていたことが考えられよう。上部堆積層である第Ⅳ層からは確実に後期終末ないしは古墳初頭に下る土器類も多く出土しており、検出遺構にも重複したものも多く認められることからその頃までの集落の継続性も窺い知れる。さらに、下層遺構面のベースとなる第Ⅴ層には部分的ではあるが弥生中期末まで遡る土器片も若干量含まれており、最下層面における面的な確認はできなかったが集落の初現がこの時期頃であることが充分に考えられよう。

Ⅲ まとめ

今回の調査では、大和・柳本古墳群周辺における集落構造の一端を考える上で有効な資料となる成果が得られた。とは言え、今回の調査地点も含めて従前の調査は面積、地域等で極めて限られた点的な調査であり、総合的な評定には依然資料不足なままである。

道浦地点の調査では、確実に弥生後期まで遡る集落の存在が確認されたことが大きな収穫であったが、同様な集落は東山麓沿いにも点在するものと推測されよう。また、こうした弥生後期頃の集落からの発展性および周辺の弥生拠点集落との関わりにより前期古墳群形成の基盤が生成されていったものと考えられるのではないだろうか。

当地域におけるこれまでの調査成果からは桜井市纏向遺跡周辺との土器様相の類似性のみが強調されるが、集落内の様相については今後の面的な調査を待たねばならない。現状ではこれら周辺地域の集落構造の解明よりも個々の古墳についての調査に重点が置かれ、周辺の生産基盤を成す集落群を含めた検討は先送りのままである。その意味からも今後はこの周辺における計画的な分布調査を手始めとして、偶発的に実施される小規模調査の成果を加えつつ検討を重ねていかねばならないであろう。

柳本遺跡群竹ノ尻地点(第3次)の調査

I はじめに

柳本遺跡群竹ノ尻地点は平成2年度に実施した建て売り住宅建設に伴う試掘調査で確認した縄文後・晩期および弥生末～古墳初頭の集落遺跡である。

今年度は、昨年度に引き続き第1次調査地の西側隣接地において個人住宅建設に伴う第3次調査を実施した。調査は平成7年8月22日より実施し、8月31日に終了した。総調査面積は約50㎡であった。



図10 調査位置図 (S=1/5000)

II 調査の結果

層序：現地表面下0.4mまでの耕作

土(第I層)、床土(第II層)の直下で床土ブロックおよび炭化物、土器片を含む灰黄褐色砂質土の第III層(図11-4層)をベースとした南北方向の素掘り小溝を検出した。この遺構検出面の下位では砂、シルトの互層堆積を成し若干の遺物を含む第IV層(図11-5～12)を介し、第V層(図11-a～d)の粘土と砂礫から成る地山へと至る。なお、地山は標高74～74.5mの間で凹凸を示し東側ではやや上がり気味に傾斜をもつ。

遺構と遺物：明確な遺構の検出は無く、第III層上面検出の小溝群のみ認められた。遺物では瓦器、陶磁器の小片が出土しており、中・近世以降の帰属が考えられる。その掘り込み面である第IV層の上部には、床土のブロックや中世の土器片が含まれ、耕作に伴う整地層であったと思われる。また、第IV層には縄文土器、古式土師器等の小片が少量ながら含まれ、第1次調査時と同時期の遺物の出土やその堆積状況から自然河道であったのかもしれない。

小結：今回の調査では、前記の遺構以外に目立った遺構は見られず特筆すべき成果はほとんど無いに等しかった。しかしながら、前年度の調査結果も含め、第1次調査地の位置する丘陵緩斜面上にのみ弥生末～古墳初頭頃の集落が営まれたことを裏付けることになり集落規模も小規模なものであることをある程度推定できる結果となった。今後はさらに東方への集落の伸張について、新たな機会に検証せねばならない。

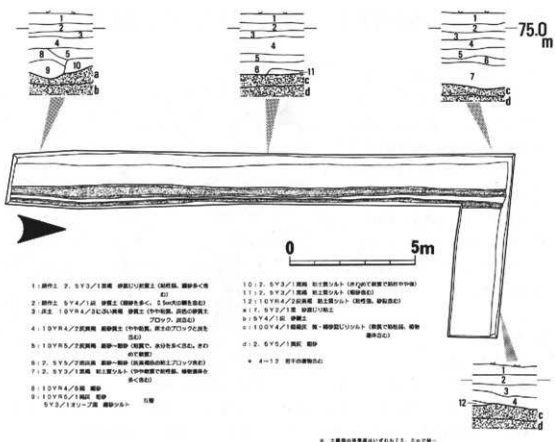


図11 遺構平面・土層図 (平面S=1/150・土層S=1/60)

和爾・森本遺跡近接地の調査

I はじめに

和爾・森本遺跡は天理市北部の森本町、和爾町および楢町にかけて所在する弥生中期～古墳後期の集落遺跡である。これまで奈良県立橿原考古学研究所により5次にわたる調査が実施され遺跡南部の様相についての把握がなされている。しかしながら遺跡の明確な範囲や縁辺部については全く発掘調査による確認が進んでおらず不明瞭と言わざるを得ないのが現状である。従前の調査は遺跡南部に所在する積水化成工業株式会社の工場敷地内において進められていたが、これ以外の地域では皆無であった。

今回、工場南部の水田地帯の一角において個人住宅の建設案がもちあがり、これに伴い範囲確認を目的とした発掘調査を実施した。調査は建物の予定地を避けるように調査区の東西と南北にL字状のトレンチを設定し、すべて人力により作業を進行した。現地調査は平成7年9月26日に開始し、同年10月23日にすべての作業を終了した。総調査面積は86㎡であった。



図12 調査地位位置図 (S=1/5000)

II 調査の概要

(1) 層序

今回の調査における基本的な層序は以下の通りである。なお、調査区東の南北トレンチでは若干層序に違いが認められるが、それについては遺構の項で補足することにし、ここでは南北トレンチにおける土層観察をもとに記述する。

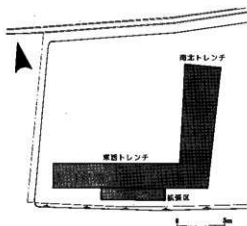


図13 調査区平面図 (S=1/400)

- 第I層**：黄灰～淡灰色砂混じり粘質土 層厚30cm前後で調査区全域に拡がりをもつ。表土層および耕作土層である。
- 第II a層**：明黄褐色砂混じり粘質土 層厚5～10cm。後世の客土によると考えられる土層であり、床土に相当する。
- 第II b層**：灰黄色砂質土 層厚10cm前後で調査区の東半に拡がるものと思われる。旧床土相当層である。
- 第III層**：明黄褐色砂礫混じり粘質土 層厚15～20cm。第IV層の遺物包含層の上部に堆積する。下部の砂礫層や遺物包含層のブロックも混じり、これらを削り込んで形成されたように思われる。基本的には客土された土壌の様子を示し最初に農地化された際の床土に相当するものと考えられる。若干の奈良・平安～中世前期の遺物を含む。
- 第IV a層**：灰黄色砂混じり粘質土（遺物包含層） 層厚20cm前後で調査区の西南部にのみ遺存する。細砂や粗砂を多く含み、遺物では奈良、平安～中世頃までの土器類がある。上部遺物包含層である。
- 第IV b層**：暗灰黄色砂混じり粘質土（遺物包含層） 層厚20cm前後。東西トレンチの全域に遺存する遺物包含層である。東西トレンチの中央部では10cmの比高差をもって溝状に窪んでいるところが見られる。弥生土器、須恵器、土師器、埴輪、平瓦等の破片を多く含み、直下の第V層ではバラス敷きの遺構面となっている。
- 第V層**：褐灰～灰黄褐砂混じり粘質土～シルト 層厚20～30cmで東西トレンチの西側に緩やかな傾斜をもって堆積する。中央部では浅い窪みを呈し、この辺りを中心に弥生土器片が多く出土している。全体的には遺物の出土は少ないが、上半部ではわずかに弥生土器の小片が出土しており、下部ではほとんど認められなかった。この層の

上面では東端で弥生中期～古墳後期頃の自然流路、西端では上面のバラス敷き遺構に伴う南北方向の大溝を検出している。

第Ⅵ層：暗灰黄～褐灰色礫混じり粘土（地山） 拳大の礫が多く混じる基盤層である。内容物に違いはあるもののほぼ調査区の全域に共通する地山面である。

(2)検出遺構

今回の調査では、南北トレンチで弥生中期～古墳中・後期の自然流路とその埋没後に掘り込まれた柱穴を、東西トレンチにおいてはバラス敷き遺構とその区画大溝、小穴等をそれぞれ検出している。以下、各遺構について概略を記す。

南北トレンチ検出遺構

自然流路 NR-01

検出面の上部における層序は最上部から第Ⅰ層耕作土、第Ⅱa・第Ⅱb層床土、第Ⅲ層と続き、第Ⅳa・Ⅳb層遺物包含層は介在せずに検出面となる第Ⅵ層の地山面になる。流路は検出幅1.4～3m、深さ0.3～0.6mで南北に蛇行して延びる。長期間にわたりとうとうと流れていたものと思われ流路の平面形にも数時期にわたる変化が窺える。埋土の観察からも容易に判別可能であるが、流れ込みの時期幅は大別して2時期に考えられよう。

埋土は、流路の南半部では上部が黄褐～灰オリーブ色粘土質シルト、下部が炭を含む灰オリーブ色細砂混じりシルト、最下層および東西両側部では褐灰～暗灰黄色砂混じり粘質土および炭混じりの粘土層である。流路の北半部では、上部の埋土が南半部と同様であるが下半は褐灰～黒褐色粘土質シルトとなっている。遺物はいずれも埋土上部より弥生～古墳後期の土器片が出土し、下部ではわずかに小片が出土したのみである。

柱穴 SP-01

南北トレンチの北端で検出された自然流路NR-01の埋没後に掘り込まれた柱穴である。径0.3m前後でやや楕円形に近い平面形状を呈する。中心には柱根が残る。掘り方埋土は上部が黒褐色粘土質シルト、下部は灰色粘土質シルトでいずれも若干量の土器小片が出土している。帰属時期は不明瞭であるが、検出面から後述するバラス敷き遺構に伴う時期とも考えられる。

東西トレンチ検出遺構

バラス敷き遺構 SX-01

東西トレンチ全域で検出した。親指大から拳大の円礫、亜円礫を第Ⅴ層の上面に敷き詰めていたもので南北の幅2～2.5m、東西の長さ13m以上の範囲に広がるものと推定される。中央部の東西に幅3.5mの浅い窪みがあり、この辺りに小穴群が集中している。バラ

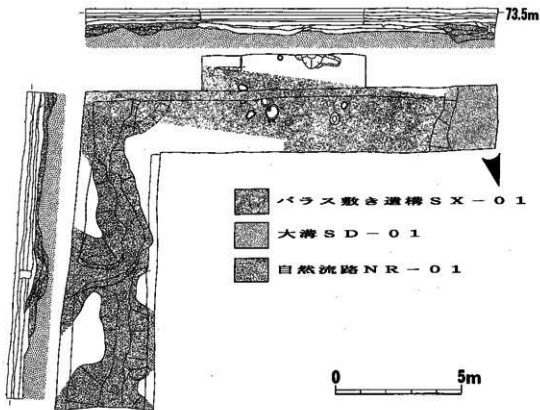


図14 遺構平面・土層図1 (S=1/150)

ス敷きの南側では一部トレンチを拡張して確認をおこなった。その結果、0.8mの比高差をもって一段高く南接した水田に向かってガラス敷きは延びず、一定の幅で東西に敷かれた区画帯であることがわかった。この区画帯は、南接した微高地の南辺を区画しているようにも考えられた。また、西端にはガラス敷き遺構の西側を区画する大溝SD-01が付随しており、東西については溝による区画が推定されよう。遺物は、ガラス面の直上より多く出土しており、奈良・平安期の須恵器、土師器を中心にわずかながら弥生土器片、埴輪片や石製品等が見られる。

大溝 SD-01

東西トレンチの西端検出の大溝である。検出幅、長さともに2.5mを測り、深さは0.7mである。埋土は上部より3層に大別可能であり、下層は暗緑灰色粘土・シルト層を呈した湿潤な堆積層であった。中層は、礫混じりの灰～灰黄褐色粘土質シルトでガラス敷き遺構の廃絶に伴う流入土と考えられる。上層は、砂礫のブロックが混じる褐灰色砂混じり粘

質土であった。遺物は、弥生土器片、須恵器、土師器の小片が出土しているが、全形が窺え時期を特定できるものは見られない。

小穴群 SP-02~10

いずれも残りは浅く、遺物の出土も少ない。バラス敷きの廃絶以後と敷設以前の掘込みと考えられ、バラス敷き遺構に伴う柱穴は確認し得なかった。時期の新しいものは拡張区の遺構の時期からおそらく中世前期頃、古いものは弥生中期あるいは古墳後期頃に帰属するものであろう。

(3)出土遺物

今回の調査で出土した遺物はいずれも小片が主体である。総量もコンテナ1箱分に満たないわずかな量であった。その内訳は、弥生土器、須恵器、土師器、埴輪、平瓦と石製品等である。各々の遺物の出土地点、帰属時期については表1を参照されたい。以下、簡略的な説明を加えておく。

1~6はいずれも中近世の雑器類である。1は、いわゆる「ヘソ皿」と呼ばれる土師質小皿で中世後期頃のものである。2および3の小片は白色系の土師質小皿で近世期のものであろう。4は鈿の部分を欠くが、口縁部形態から中世末~近世初頭に帰属時期が求められる土師質羽釜である。5は底部のみの破片であるが、色調および焼成状態より東播系須恵器の摺鉢であることがわかる。6は大和産の瓦質土器大鉢の底部片である。

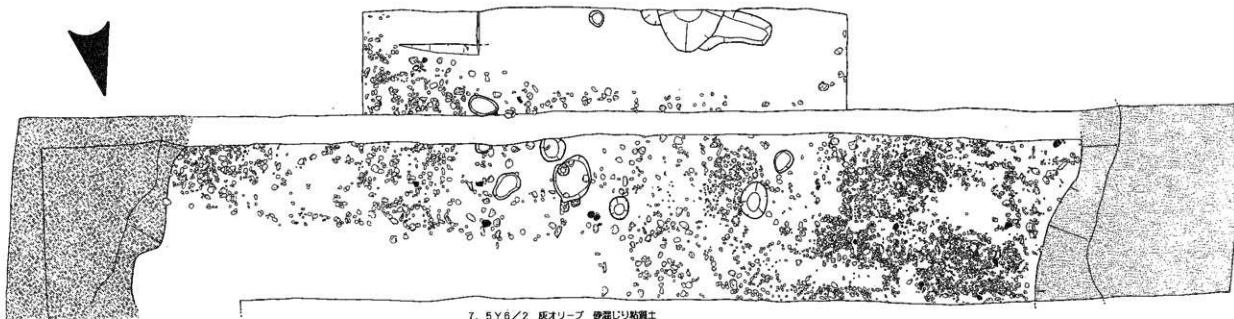
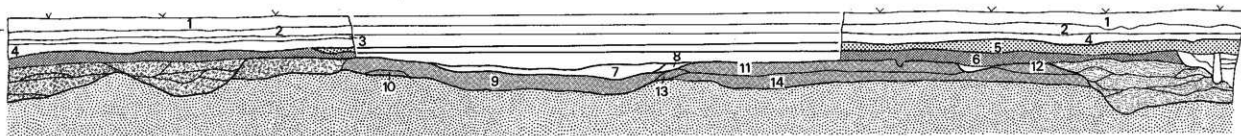
7~17は須恵器である。7・8・11の壺はいずれも口縁端部を丸く仕上げている。9の環蓋の口縁部小片には端部に短いかえりが付く。10・15・16・17の環身はシャープな作りの環身10・15と、受部、かえりの小さな環身16・17がある。前者は5世紀末~6世紀初頭に、後者は6世紀末頃に帰属時期が求められる。12~14の壺、環身には小さく低い高台が付き、端部を丸く仕上げた13や、12・14のように平坦面をつくり出したものがある。

18は円筒埴輪片である。外面の摩滅が著しく調整は不明であるが、内面には指頭ナデを残す。川西編年V期に属するものである。19は形象埴輪片である。表裏両面に線刻が施される。おそらく衣笠形埴輪の立ち飾りの一部であろう。

21・22・32~34・39は平瓦である。焼成状態には種々のものが見られ、須恵質のものも含まれる。32・34にのみ凸面に縄目タタキ、凹面には布目を残す。39の凸面は、粘土板を取るときに生じた糸切り痕が残る。

23~28も須恵器である。24と27の外面と底部にはそれぞれ線刻が施されている。その他の高台付きの環身は前述の12・14と同形態のもので、奈良時代頃のものである。

29および30は古墳中・後期の土師器である。29の甕には内面に靉の圧痕が残る。30の高環脚柱部には外面にタテヘラナデ、内面にしほり痕が残る。



1. 第I層 耕作土 2.5Y4/1 黄灰~10YR8/1 灰白 砂混じり粘質土
2. 第IIa層 10YR6/8 明黄褐 砂混じり粘質土
3. 第IIb層 2.5Y6/2 黄灰 砂混じり粘質土
4. 第III層 10YR6/6 明黄褐 砂混じり粘質土
5. 第IVa層 遺物包含層 2.5Y5/1 灰黄砂 混じり粘質土
6. 第IVb層 遺物包含層 2.5Y5/2 相灰黄 砂混じり粘質土
(小礫、灰混じり)

7. 5Y6/2 灰オリーブ 砂混じり粘質土
 8. 5Y5/3 灰オリーブ 砂混じり粘質土
 9. 第V層 2.5Y6/2 黄灰 砂混じり粘質土
 10. 第V層 5Y5/1 灰 砂混じり粘質土
 11. 第V層 5Y6/2 灰オリーブ 砂混じり粘質土
 12. 第V層 2.5Y4/2 相灰黄 砂混じり粘質土
 13. 第V層 5Y5/1 灰 砂混じり粘質土
 14. 第V層 5Y6/2 灰オリーブ 砂混じり粘質土
- 地山 2.5Y5/2 相灰黄~10YR5/1 相灰 砂混じり粘質土~砂礫土



図15 遺構平面・土層図2 (S=1/50)

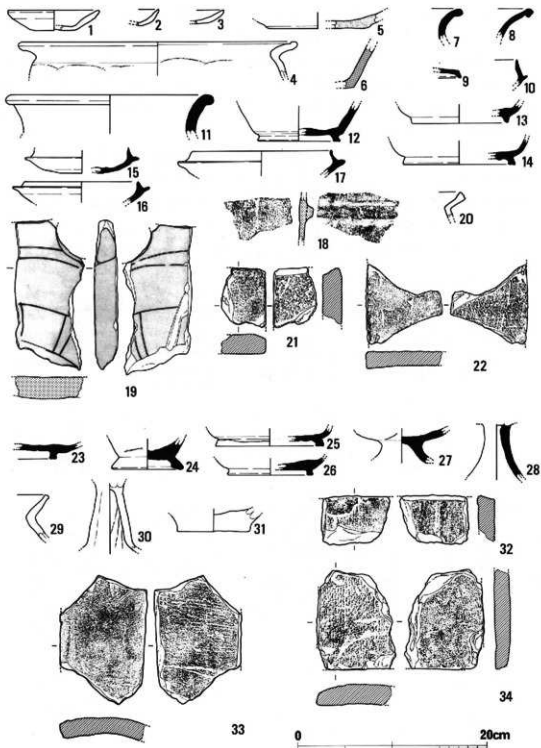


图16 出土遗物实测图1 (S=1/4)

20・31・35・36；38・40～42は弥生土器である。20の甕の口縁端部には凹線が巡る。35の底部には外面にケズリ、内面に板ナデが残る。40の底部には外面にタテハケ、内面に指頭圧痕が明瞭に残る。どちらも甕になるであろう。38は円錐状の小さな脚台部で台付き鉢等の一部と考えられる。41は頸部付近の外面に刻みが施された広口壺である。調整はわずかにタテハケが残る。42は二重口縁壺の小片。これらの弥生土器では弥生時代中期頃を主体とし後期のものも若干含まれている。

37の須恵器壺は外面をケズリの後に回転ナデをしており、底部にはヘラ切り痕が残る。43は坏身小片であり、立ち上がりや受部が小さいところから6世紀後半のものであろう。44～46の石には加工痕が認められるものである。45は長さ16.0cm、最大幅9.0cmを測り、2ヶ所にほぞ穴状の加工を施すもので1つは平坦面の中央に見られる。46は3.0cm前後の大きさ、厚さ0.5cm強で石帯に似た形態を呈している。いずれも石材は不明である。

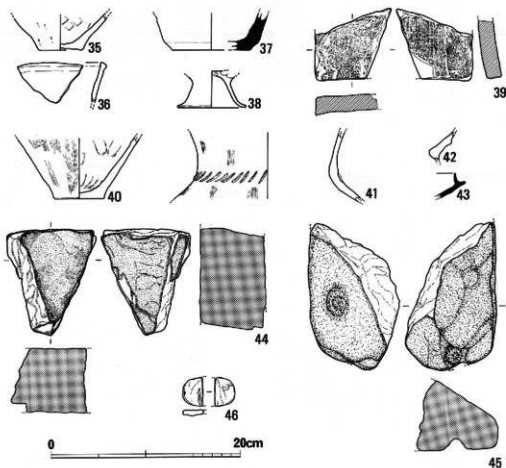


図17 出土遺物実測図2 (S=1/4)

III まとめ

今回、和爾・森本遺跡南部における最初の範囲確認調査を実施したが結果的には従前の調査で知られていた弥生～古墳時代の集落は南には拡がらず、わずかに南北方向の自然流路の埋土中や包含層出土遺物に集落の当該

時期の遺物が見られたに過ぎなかった。しかしながら、これまで和爾・森本遺跡では未確認であった奈良・平安初頭期の土器や瓦類、特殊なバラス敷き遺構等の存在から、当該調査地が和爾・森本遺跡の範疇からは逸れた別の遺跡であると確認された意義は大きい。

次に、当該調査地周辺における奈良・平安初頭期の動向を踏まえた検討をおこないまとめにかえておきたい。

周辺の遺跡：当該地周辺では、南西に長寺廃寺、南に柿本寺跡、在原寺跡、石上廃寺、北東に願興寺等の古代寺院の存在が伝えられる。また、最も近接して南に楢池廃寺が存在する。この地域の東方の山沿いには古代山辺の道が通ると伝えられ、膳夫、石上、柿本、日佐、和爾氏等の古代豪族の本貫地がこの辺りに集中することと方角地割がこの地より西に拡がることも特徴的である。先述の楢池廃寺は、調査地の南200mの弁天池北岸で採集された古瓦類より想定された寺院であり、その寺域の拡がりについては不明である。

楢池廃寺との関連について：現在の所見では寺域の不明な楢池廃寺との関連について近在した同時期性の高い遺跡であるという共通点のみを強調せざるを得ない。しかしながらバラス敷き遺構SX-01が調査地の南に拡がる周囲の条里よりやや西に振る方形地割の一辺と重なり、弁天池北岸の古瓦採集地点がこの南西角とも重なること等から考えてみると、この範囲が楢池廃寺の寺域として考えられ無くもない可能性を見出すことができよう。いずれにせよ現状では想定域を脱するものではなく今後の調査の積み重ねにより結論は導き出されよう。

番号	器種	出土地点・層位	備考
1	土師質小皿	東西トレンチ第Ⅱ層	中世後期
2	土師質小皿	東西トレンチ第Ⅱ層	近世
3	土師質小皿	東西トレンチ第Ⅱ層	近世
4	土師質羽釜	東西トレンチ第Ⅱ層	中世末～近世初頭
5	須恵器杯鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	中世前期・東播磨須恵器
6	瓦質鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	中世末～近世初頭・大和産
7	須恵器壺	東西トレンチ第Ⅱ層	
8	須恵器壺	東西トレンチ第Ⅱ層	
9	須恵器杯鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	
10	須恵器杯鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	
11	須恵器杯鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	
12	須恵器杯鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	
13	須恵器杯鉢	板敷区第Ⅱ層	
14	須恵器杯鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	
15	須恵器杯鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	
16	須恵器杯鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	
17	須恵器杯鉢	東西トレンチ第Ⅱ層	
18	円蓋埴輪	東西トレンチ第Ⅱ層	衣笠形埴輪の立ち飾り 図版文・原形様式
19	形埴輪	東西トレンチ第Ⅱ層	
20	弥生土器壺	東西トレンチ第Ⅱ層	
21	平瓦	東西トレンチ第Ⅱ層	
22	平瓦	東西トレンチ第Ⅱ層	
23	須恵器杯鉢	東西トレンチSX-01(埋土直上)	須恵質
24	須恵器壺	東西トレンチSX-01(埋土直上)	外側に縁割
25	須恵器杯鉢	東西トレンチSX-01(埋土直上)	
26	須恵器杯鉢	東西トレンチSX-01(埋土直上)	
27	須恵器高坏	東西トレンチSX-01(埋土直上)	外側に縁割
28	須恵器高坏	東西トレンチSX-01(埋土直上)	
29	土師器壺	東西トレンチSX-01(埋土直上)	
30	土師器高坏	東西トレンチSX-01(埋土直上)	
31	弥生土器壺	東西トレンチSX-01(埋土直上)	
32	平瓦	東西トレンチSX-01(埋土直上)	凸面に異目叩き
33	平瓦	東西トレンチSX-01(埋土直上)	須恵質
34	平瓦	東西トレンチSX-01(埋土直上)	須恵質・凸面に異目叩き
35	弥生土器鉢	東西トレンチ中央第Ⅴ層	
36	弥生土器鉢	東西トレンチ中央第Ⅴ層	
37	須恵器壺	南北トレンチ第Ⅱ層	
38	弥生土器鉢	南北トレンチ第Ⅱ層	
39	平瓦	南北トレンチ第Ⅱ層	古竹き跡の脚部 凸面に承切り痕
40	弥生土器壺	東西トレンチNR-01	
41	弥生土器壺	南北トレンチNR-01	
42	弥生土器壺	南北トレンチNR-01	扉取一坪様式 二重口縁式
43	須恵器杯鉢	南北トレンチNR-01	
44	石製品	板敷区中央第Ⅱ層	
45	石製品	東西トレンチSX-01(埋土直上)	
46	石製品	東西トレンチSX-01(埋土直上)	

表1 出土遺物一覧



図18 檜池廃寺と今回の調査地 (S=1/5000)

左下：周辺の古代寺院の分布 (S=1/50000)

※アミ目部分は古瓦の散布した範囲



調査前全景
(北西から)



調査区南壁東半
土層断面
(北西から)



溝SD-04
遺物出土状況
(南から)



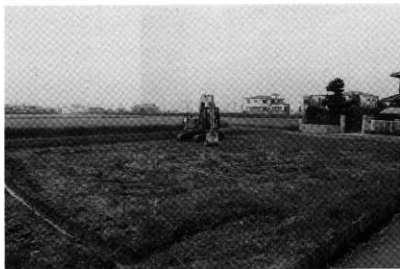
調査区全景
(東から)



調査区全景
(西から)



調査風景



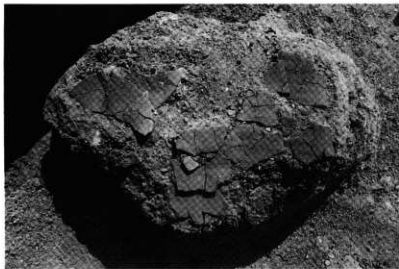
調査前全景
(北東から)



バラス敷き遺構
SX-01検出状況
(西から)



自然流路NR-01
完掘状況
(北から)



自然流路NR-01
埋土最上部
遺物出土状況
(西から)



バラス敷き遺構
SX-01
(東から)



調査風景

平成8年3月

天理市埋蔵文化財調査概報

柳本遺跡群道浦地点

柳本遺跡群竹ノ尻地点(第3次)

和爾・森本遺跡近接地

発行	天理市教育委員会
編集	天理市川原城町605番地
印刷	天理時報社
	天理市稲葉町80番地